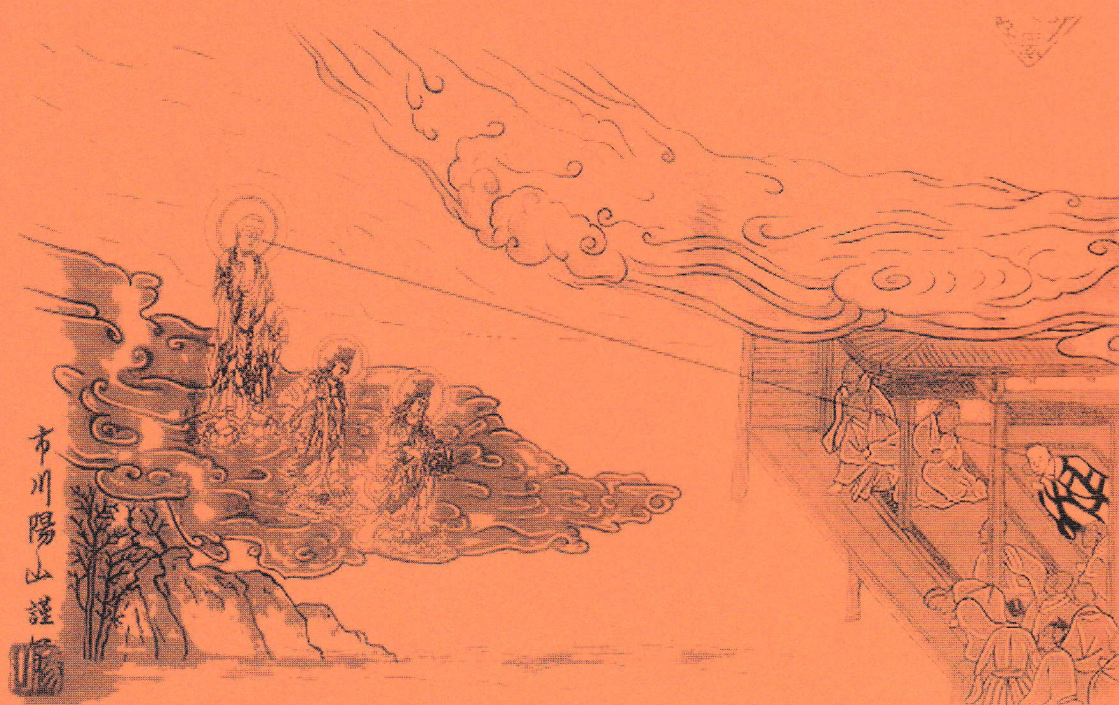


みおしえ



平成23年には法然上人の八百年御忌をお迎えします。

埼玉教区浄土宗青年会

<http://www.saijousei.com>

「月影の

いたらぬ里はなけれども

ながむる人の心にぞすむ」

— 法然上人御作 —

~~~~~

このお歌は、浄土宗の宗祖法然上人がお詠みになられたものであり、浄土宗の宗歌でもあります。

このお歌の意味は、このようになります。

「月の光は、山にも里にも隈無く照らしていますが、その当たり前のように照らしていてくれることのありがたさに気がついた人だけが、その美しい月を賞でることができるのです。」

月の光と同じように阿弥陀様の全ての人を救おうとされるお慈悲の光は、阿弥陀様の御心をいただいて日々のお念仏を申す人のみに宿り住し澄みわたるのです。しっかりとお念仏に励みましょう。」

~~~~~

私の寺のお檀家さんでは是非紹介させていただきたい方がいらつしゃいます。その方は三十年ほど前に奥様を亡くされました。当時まだ小学生だった娘さんお二人を再婚もせず、男手一つで育ててこられました。掃除、洗濯、食事、全てに手を抜くことはないのです。お盆のお参りなどでお宅に伺うとよく分かります。玄関からお座敷まで綺麗にされており、ベランダにはしわ一つない洗濯物が干してあり、お仏壇には手作りのお膳が供えられていました。

これだけでも、なかなか真似のできることはありませんが、もう一つ素晴らしい行いをされています。それは、奥様が亡くなってから三十数年間、毎週日曜日の朝のお墓参りを欠かされたことがないということです。ご当人曰く、「もう、決まり事みたいなものですよ。」と

のこと。日曜日に予定がある時はいつもより早い時間にお参りするなどしているそうです。亡くなってから二、三年の間は定期的にお墓参りされる方はいらつしやいますが、ここまでの方はなかなかいらつしやらないと思います。

ここ数年はお孫さんを連れて来られるなど微笑ましい姿が見られるようになりました。ある時に尋ねたことがあります。「お仕事も忙しかったでしょうに家事や育児等をどうして、そんなに頑張れたのですか？」それに対しての答えは「うちの本尊さん（阿弥陀様）や亡くなった嫁さんが見守ってくれていたからかな。」というものでした。また、「娘達もそれぞれ嫁ぎ、孫の顔も見られたのでいつお迎えが来てもいいんだよね。仏壇の前でお念仏している時にずっと阿弥陀さんが迎えに来てくれるような気がするんだ。」ともおっしゃっていました。

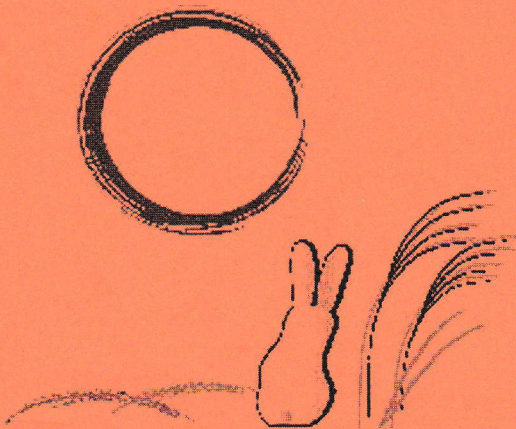
皆さんは、このお檀家さんの姿がどのように映りましたでしょうか。親として子供の面倒を見るのは当たり前と思う方もいらつしやるかと思いますが、この方はその当たり前をとて真摯に受け止め実践されています。そして、自分が頑張れることが阿弥陀様や亡くなった奥様に見守られているのだということに気づくことが

できたということは、とても素敵なことだと思いませんか。阿弥陀様のことを思い、お念仏を称えれば必ず阿弥陀様のお慈悲を感じる事ができ、また、臨終の時には必ずお迎えをいただけるのです。私も含め、皆さん、日々お念仏に励み、精進して参りましょう。

合掌

文責

埼玉青広報編集局



表紙の解説（法然上人の御往生）

表紙の絵は、浄土宗の宗祖法然上人が、阿弥陀様にお迎えをいただき往生された時のご様子です。

建暦元年（一一一一）十一月、配流より五年ぶりに京都へ戻られた法然上人は、東山大谷の禅房（現在の知恩院勢至堂あたり）に住まわれます。

建暦二年（一一一二）の正月二日からは食事が進まず、老衰のご様子となられました。しかし、ここ二三年不自由なご様子だった視力・聴力が、この頃は不思議と回復。声高に念仏を称え、お弟子様達とも語り合われたそうです。

そのような日々にも次第に衰弱が進み、往生も間近と思われた正月二十三日、お弟子の源智上人の願いに応え、「一枚起請文」を書かれました。

翌二十四日の夕方から二十五日にかけては、念仏の声が絶える事はなく、お弟子様五十六人が順々に入れ代わり、法然上人の声に合わせて念仏を称えます。

二十五日午前十一時頃、念仏の声は小さくなるも、時々声高な念仏が交じりました。そして正午、念仏の音が段々に弱まり、慈覚大師から相伝されている九条の袈裟を掛け、頭北面西のまま「光明遍照十方世界 念仏衆生 摂取不捨」の経文を唱え、お声が聞こえなくなってから、唇や舌をお動かしになる事が十余遍ばかり続き、嘆き悲しむお弟子様達と信者に見守られる中、面影は微笑むが如く、眠る様に極楽浄土へ往生なさいました。御歳八十歳でした。

平成二十三年は、法然上人八百年御忌（八百回忌）にあたります。

合掌

解説執筆

正樹院

齊藤栄規

法然上人略年表

（『法然上人行状絵図』による）

- | | | |
|-----------|-----|--|
| 一一三三（長承二） | 1才 | 四月七日、美作国（岡山県）にて、御生誕。幼名 勢至丸。 |
| 一一四一（永治元） | 9才 | 父、漆間時国、明石定明の夜討ちにあい、死去。叔父・観覺の居る菩提寺に身を寄せる。 |
| 一一四七（久安三） | 15才 | 比叡山に登り、源光に師事。 |
| 一一五〇（久安六） | 18才 | 皇円のもとで出家、受戒。 |
| 一一五六（保元元） | 24才 | 西塔黒谷に隠遁し、叡空の門に入る。法然房源空となる。 |
| 一一七五（承安五） | 43才 | 嵯峨の清涼寺に参籠。その後、南都の学匠を尋ねる。 |
| 一一九七（建久八） | 65才 | 立教開宗（専修念仏に帰入する） |
| 一一九八（建久九） | 66才 | 二祖・聖光上人、門下に入る。 |
| 一二二二（建暦二） | 80才 | 『選択本願念仏集』を撰述。 |
| 一月二十三日、 | | 「一枚起請文」を記す。 |
| 一月二十五日、 | | 御往生。 |

発行

埼玉教区浄土宗青年会

会

長石田琢道

広報編集局長 石田浩臣

無断複写を禁止します